



〈連載(210)〉

広辞苑とブルーバックス



大阪府立大学大学院・海洋システム工学分野・教授
池田 良穂



広辞苑

船の科学

年末に2冊の本が自宅に届いた。その1冊は、分厚い「広辞苑」。岩波書店から発行されている辞書で、最近の電子辞書には必ずといっていいほど入っている定評のある辞書である。岩波書店の広辞苑編集部から、船舶関連部分の執筆依頼があったのは2年以上前のことで、これまで入っていた言葉の取捨選択および説明文の検討と、新しく入れる言葉の選択と説明文の執筆を頼まれた。約半年かけて検討、執筆を行い、2年前の夏に入稿して以来、編集部での内部審査を経て、ようやく目の目を見た。

さっそく、執筆した新規の言葉のどのく

らいが採用されたかを調べてみた。採用されたのは以下のとおり。⇒で示したのは、編集部の判断で原稿から一部変更があったもの。

- ・旅客船 ⇒客船 りょかくせん
旅客を主に運ぶ船の総称。法規的には、13名以上の旅客定員を持つ船。
- ・耐航性 たいこうせい
 - ① 船舶が安全に航海を続けることのできる性能。
 - ② 波の中での船舶の運動性能。
- ・凌波性 りょうはせい
波浪中を航走できる性能。
- ・堪航性⇒堪航能力 たんこうせい
風波中を航海できる性能。
- ・追い波 おいなみ
航走中の船舶が船尾方向から受ける波、またはその状況。
- ・向い波 むかいなみ
航走中の船舶が船首方向から受ける波、またはその状況。
- ・横波 よこなみ
船舶が横方向から受ける波、またはその状況。
- ・滑走艇 かっそうてい

- 船底に働く揚力を利用して船体を浮上させ、高速で航走する小型船。⇒モーターボート
- ・国際満載喫水線条約 こくさいまんさいきつすいせんじょうやく
船舶の航海中の安全性を確保するために国際海事機関が定めた船舶の喫水線に関する国際規則。
 - ・船殻 せんこく
船の強度を維持するための、外板および骨組みからなる船体構造。
 - ・航洋船 こうようせん
外海を航海する能力のある船。
 - ・外板 がいはん
船舶の最も外側を構成する板で、船底板、船側板等からなる。水密で船内への浸水を防ぐ。
 - ・二重底 にじゅうてい⇒にじゅうぞこ
座礁などによる船底損傷時に、船内への浸水を制限するために船底に設けた2重の水密板からなる構造。外部の水密板は船底板、内部は内底板と呼ばれる。
 - ・バラ積み船⇒ばら積み貨物船 ばらづみせん
石炭、小麦などの貨物を、梱包せずに、そのまま船倉に入れて輸送する貨物船。
 - ・バラスト水⇒バラスト ばらすとすい
船の安定および喫水を維持するためのおもりとして船内に搭載する水
 - ・滞船 たいせん
港が混雑して、荷役が滞った状況。
 - ・押し船 おしぶね
バージ等の非動力船を押しして航海する船。
 - ・曳き船 ひきぶね ⇒ タグボート
他船などの曳航に従事するための小型

- 船。
- ・砕波 さいは
①波が砕けること。②砕けた波。
 - ・傾斜試験 けいしゃしけん
船舶の復原性を調べるために、重量物等を移動した時の傾斜角を計測する試験。
 - ・動力船 どうりょくせん
エンジンなどの動力を用いて推進する船舶の総称。
 - ・荒天航法 こうてんこうほう
非常に荒れた海において船舶の安全を守るための操船手段。
 - ・自動車渡船 じどうしゃとせん
自動車が自走で乗下船できる船舶。一般的に運転者や旅客も乗せる。⇒ カーフェリー
 - ・パナマックス
パナマ運河を通過できるぎりぎりの大きさの船舶の呼称。幅は32.2m、長さは294m。
 - ・喫水 きつすい
船舶の海面下の深さ。水面から船底までの鉛直距離。
 - ・軽頭船 けいとうせん
重心が低く、復原性が大きい船の総称で、横揺れ固有周期が短く、ころころとよく揺れる。
 - ・現図 げんず （現在の説明が不足：船体の設計図??）
船舶建造において、設計図に基づいて描いた1つ1つの材料や部材の詳細な図面。昔は、実寸大の図面を描いたが、最近はコンピュータ制御した切断機を使うので、コンピュータに入力する数値データとなっている。（後半がカットされた）
 - ・メタセンター高さ めたせんたーたかさ

船舶の正立時と傾斜時の浮力中心からの鉛直線の交点（メタセンター）と重心との距離で、船舶の復原力の大きさを表す指標のひとつ。

・シーマージン

船舶の経年変化、表面汚損、海象の影響による速度減少を補うためのエンジン馬力等の余裕。

・重頭船 じゅうとうせん

重心が高く、復原性が小さい船の総称で、転覆の危険が大きい。反対語⇒軽頭船

・主甲板 しゅこうはん

構造上最も強度に寄与する甲板。＝メインデッキ

・深海波 しんかいば

水底の影響がない水深が十分深い所での波。波長の1/2以上の水深があれば、深海波とみなすことができる。

・水線面 すいせんめん

水面で切った船舶の水平断面。

・船型 せんけい

① 船の外形。

② 主に、水面下の船体形状。

・操船 そうせん

舵、推進器、帆などによって船を操縦すること。

・造波抵抗 ぞうはていこう

物体が水中または水面を移動する時に、水面に波を発生させることによって働く抵抗。

・フルード数 ふるーどすう

重力の作用が相似になるように、慣性力と重力の比を一定にするために定義された無次元物理量で、物体の速度を、重力加速度と長さの積の平方根で割った数。英造船技師フルードが発見した。

・台船 だいせん

土砂の運搬やクレーンなどの作業台として用いる箱型の船舶。

・多軸船 たじくせん

複数のスクリュープローペラを有する船舶。

・バウバイザー ばうばいざー

船の船首にある開口またはドアを波浪から守るために設けた開閉型の船首部構造。

・伴流 はんりゅう

進行する船の表面に働く粘性抵抗によって船体近傍に生ずる、船速よりも遅い流れ。

・肥瘦係数 ひせきけいすう

船の形状の瘠せ具合を表す指標で、水面下の船の体積と、船の長さ、幅、喫水の積との比。

・平甲板船 ひらこうはんせん

上甲板上に船楼をもたず、平坦な甲板の船。

・風雨密

雨や風を通さないこと。水密よりは密閉性能が劣る。

・ホギング

波の中の船舶が、船体中央に波の山、船首・船尾に波の谷が来た時に、船体に大きな曲げモーメントが作用する状態。

・サギング

波の中の船舶が、船体中央に波の谷、船首・船尾に波の山が来た時に、船体に大きな曲げモーメントが作用する状態。

・摩擦抵抗 まさつていこう

液体と物体との相対運動によって物体表面に平行に働く力で、流体のもつ粘性に由来する。

・モーダルシフト

二酸化炭素などによる環境への負荷を低

減するために、輸送機関を、船舶や鉄道などに切り替えること。

・ライター Lie to

船が、風波が激しくて航行できない時に、船を波にたてて転覆しないように耐え凌ぐこと。

・ライフジャケット ⇒救命胴衣

船舶や飛行機の遭難時に乗船者を溺死から守るための、上半身に着ることのできる浮力材。

一方、残念ながら提案したものの採用にならなかった言葉は、

航海速力、自動車専用船、シアー、試験水槽、動復原力、ハブ港、エアークッション船、減揺水槽、エル・エヌ・ジー船、海上交通、海上交通管制、海上交通工学、海上試運転、二重船殻、ブルーリボン、ワールドスケール、ポッド推進器、半没水船、旋回性、針路安定性、空洞現象、計画造船、ケミカルタンカー、ハッチカバー、国際航海、重量物運搬船、上架、損傷時復原性、機関長、区画、軽荷-重量、港内速力、甲板長、三角波、自動操舵装置、尺度影響、斜波、遮浪甲板船、自由水影響、主機、常用速力、正面船図、深海潜水艇、垂線間長、ストリップ法、制限水路、静的復原力、石油掘削船、設計波、船種、線図（船舶用語の追加説明が必要）、船体運動、操縦（船も追加すべき）、操縦性、造船学、操舵室、操舵輪、粗度、舵角、縦強度、調査船、出会周期、出会い角、伝達馬力、粘性抵抗、波速、半潜水式海洋構造物、フェアリング、不規則波、付加質量、浮遊式構造物、浮体、防撓材、補機、防舷材、ファンネル、木甲板、有効馬力、遊歩甲板、横傾斜、予備浮

力、列車航送船、ローロー船。

もう一冊、届いたのが講談社のブルーボックス「図解 船の科学」。

ブルーボックスからは15年ほど前に「新しい船の科学」を上梓したが、初版を売りきるのに10年を要して、講談社の基準に合わずに絶版になった経緯があった。その後、ナツメ社からの依頼に対して、このブルーボックスを下敷きにして「図解雑学 船のしくみ」を出版。幸いなことに売れ行き好調で、1年で5刷となって、発行部数も「新しい船の科学」の初版冊数を超えた。これもあって講談社から再度の執筆依頼があったわけだが、ナツメ社の本とは全く違ったものとすべく、約半年かけて一から書き起こしたのが12月20日にできあがってきたのである。

この新ブルーボックスでは、青函航路に就航したオーストラリア製の超高速カーフェリー「ナッチャンRera」をストーリーの中心に添えて、高速船の技術を中心に船舶技術の解説を試みたが、売れ行きを心配した編集部の方針で大型船にも触れることになった。そのため、本のサブタイトルに「超高速船・超巨大船のメカニズム」とあるように、高速船から超大型船まで、まんべんなく紹介する内容となった。前著に比べると、写真と図面をふんだんに入れて、視覚的にも理解しやすくなったと思う。

さらに出版づいていて、この正月休みには、成山堂出版から頼まれていた「内航客船のカーフェリー」の改訂作業に没頭した。この本は、交通ブックスの1冊として10年前に出版されたが、在庫がなくなったとの

ことで改訂を1年ほど前に依頼されていたが、前述の「広辞苑」や「ブルーバックス」の執筆に追われて、作業が後回しになっていた。2冊が出来上がったこともあり、一気に訂正をしようとは思ったものの、この10年間の内航客船界の動きは激しく、結局、全面書き換えに近いほどの作業量となった。例えば、本誌に関係の深い鉄道建設・運輸施設整備支援機構は、まだ船舶整備公団という名称であったし、初版で紹介した多くのフェリー会社が架橋の影響で姿を消していた。この改訂作業の中で、様々なデ

ータを修正してみると、この激動の10年間で改めて振り返るよい機会になった。

最後に、内航客船業界も油価格の高騰で厳しい経営を強いられているが、ピンチはチャンス。油の価格はあらゆる輸送事業に影響を与えており、苦しいのはより多くのエネルギーを使う飛行機や自動車の方がはるかに厳しく、船のもつ地球に優しい輸送機関という特性からくる競争力の順位は、相対的には変わらないはず。この新しい年が、内航客船界にとって飛躍の年になることを祈念したい。

地球環境にやさしく
暮らしを支える旅客船



社団法人 日本旅客船協会

東京都千代田区麹町二丁目3番
アーバンBLD麹町
TEL03-3265-9681 〒102-0083

ホームページ <http://www.jships.or.jp>